

企業（ほんもの）を活用して 障害者の働く力を育てる

岡崎美穂（加古川はぐるま福祉会（加古川市））



こんにちは。加古川はぐるま福祉会から参りました岡崎と申します。よろしくお願ひします。今日はこの会議がどんな会議かもわからず、とにかく加古川はぐるま福祉会でやっていることをお伝えするというこゝで来させていただきました。共に働く地域をどう作るかというテーマですが、少し私がお話の内容とは違うのかなあという複雑な気持ちもありますが、とにかく予定していたとおりにお話をさせていただきたいと思ひます。

働く力を育てる加古川はぐるま福祉会
加古川はぐるま福祉会は元々は知的障害者の通所授産施設「加古川はぐるまの家」からのスタートです。平成8年に加古川市立知的障害者総合支援センターを市から受託して、運営をさせていただいています。基本理

念は、「厳しい社会から守られる場所ではなく、人生を切り開くために力を養う場所でありたい」と願って26年目を迎えています。加古川はぐるま福祉会は4つの部からなっています。今日は「働く」ということなので、労働訓練部というところと就業支援部のお話をさせていただきたいと思ひます。

労働訓練部は通所授産施設「加古川はぐるまの家」が受け持っていて、作業を通して6時間、持っている力を精一杯発揮していただきながら、働く力を育てるということを目的にやっています。就業支援部は、国の事業の「障害者就業・生活支援センター」と市の事業の「就労支援センター」が協力し合っ成り立っています。ここでは障害の種別を問わず、就職したい、働きたいと思ひ方の方の応援をし、就業とその生活を支援することを目的としています。

働く力を育てるために大切にしていること

働く力を育てるために、5つのことを大切にしています。1つ目はいろんな作業種の開拓が必要です。2つ目は提供方法の創意工夫ということで作業分析をして、工程を分けたり、組み立てたり、流れ作業にしたり、単独作業にしたりと、工夫次第で限られた

作業種もバリエーションを広げることができます。3つ目は仕事量の確保ということで、伸びる力を引き出すためには常に120パーセント以上の作業量を確保することにしていきます。4つ目は労働・賃金・暮らしの実体験ということで、自分の稼いだわずかなお金を大好きなCDを買ったり、ボーナスでは家族と一緒に外食してごちそうしたりというような身近な実体験が働く意欲につながるというように思っております。5つ目はプラスのアプローチということで、「できる」「できた」という積み重ねは、自信を生み出します。スモールステップとプラスのアプローチを心がけています。

こういう5つのことを大切にしながら訓練を行っているわけですが、作業室の仕事は全て会社からの下請け作業です。ノルマや納期も厳しいものばかりです。作業の内容はいろいろですけれども、なるべく基準のはっきりしたもの、感覚の求められるもの、硬物、やわらか物、と作業班によって異なります。そして人によって作業の進め方を工夫しています。またその人がどのように作業を進めたらいいかということだけではなく、効率も大切にしています。流れ作業であれば、ベルコンを使って取る手、置く向き、動作など、いかに効率よくこなして数を上げて採算ベースに乗せていくかということも職員は考えています。

「会社」で働く魅力とは

というように、作業室ではより会社に近い環境を意識しながらやっています。でも残念ながら施設は模擬的な場所にすぎないのですよね。そこで働くということを実感

できる人はそれでいいかも知れないのですが、模擬的な場面では働くことが体得できない人たちが沢山います。どういう人たちかというと、それは障害の重い人達です。そういう障害の重い人達ほど偽物ではなく本物の場所で体験することが必要ではないのかなということで、昭和63年から訓練の場を企業の場に求めるようになりました。現在では4箇所企業内授産をやっています。企業の中にはいろんな作業が溢れています。従業員さんと同じラインで働いてたり、直接指示を受けたり、一緒に休憩時間を過ごしたり、守衛さんから「お疲れさん、明日も頼むよ」というようなちょっとした声掛けがあったり、何よりも会社という本物がかもし出す雰囲気があるところには流れています。それら全てが「本物や」というところが会社の魅力ではないかというふうに私は感じています。

それではどんな所で働いているかという企業内授産を4箇所紹介させていただきます。1つ目は、「K運輸株式会社」。大手の肥料会社の工場なので、物流業務全般を受け持つ運輸業です。広い構内で肥料を載せた特殊車両が行きかって、船や大型トラックが荷積みのために常に出入りしています。構内は安全確保義務が徹底要求されます。また港に面していて、風がしょっちゅう吹いていて、肥料が舞っています。暑さ寒さは特別です。そういった環境の中で彼らは働いています。労働訓練部と言って、働く力を育てるということに属する人たちが5人、そして職員が1人出向しています。作業内容は、ボックスシートの回収と選別整理です。肥料が出荷されると、構内にボックス



シートが散乱しています。それをヘルメットをかぶって粉塵マスクをしてリヤカーを引きながら指差し確認をして回収していきます。回収後持ち場に持ち帰って種類ごとに選別・整理を行います。大雑把な仕事ですが、雨も風も関係なく忍耐力も求められます。そして一番大事なのは、「一日安全に」ということです。ここにいる5人が一番楽しみにしている時間というのが食堂で過ごすひと時です。他の企業内授産に比べるとちょっと豪華な昼の弁当、それから昼休みに大きな食堂で従業員の方と将棋を一緒にしたりとか、できない人は将棋を端で見たりとか、新聞を反対に見てたりとかいうようなこともあるのですが、一緒に過ごす時間がすごく楽しみなようです。

次はS衣料株式会社についてです。ここはリネンサプライ業の会社です。巨大なクリーニング屋さんといったところですね。繁忙期は年末年始、お盆休み、行楽シーズンと世間が楽しいことをしている時に忙しい会社です。ここも6時間精一杯働いて働く力を育てるってことをやっている労働訓練部の利用者7名と職員2名で行っています。作業内容は、洗いあがった製品の検品、

たたみ、結束作業です。柔らかなものを扱いますので、感覚的な作業で、見栄えが求められます。背中ではタンブラーが回っていて、夏場は40度を超える蒸し風呂の中で働いています。もちろん残業や休日出勤もあります。

次に株式会社Uです。これは労働訓練部と就職を目指している就業支援部が合同で活用しています。使い終わった瓶を洗って再出荷するというリユース瓶の会社です。狭い構内にはコンテナボックスを乗せたパレットが何台も積まれていて、この間をぬってフォークリフトが行きかっています。一応屋内なのですが、屋内といっても屋根と覆いがあるだけで屋外作業は別で天候に関係なく続行されます。そんなところで労働と就業の利用者さんが10名、職員が2名で働いています。主な作業は洗う前の準備作業で、統一規格瓶の選別作業を行っています。ラインに流しながら1人1種類から3種類の瓶を担当して振り分け検品していきます。瓶でも欠けがないか割れないか、リユース瓶もいつまでも使えるわけではないので、新旧の区別があったり、よく似ているけれども他社瓶であったりするような選別もあります。その他フィルム剥がしやキャップ取りの作業もあります。その他洗浄ラインで従業員の指示を受けながら作業を行うこともあります。基準の変更はどんどんありますけれども、×がはっきりとした作業が多くて、段階を追って活躍できるポジションがたくさんあります。この会社でも安全面、体力面、忍耐力が養われます。

最後にY産業株式会社です。樹脂部品の成形の会社で、樹脂部品にまつわる組み立てであるとか、検品作業も行う会社です。ここ

は就業支援部の方のみで活用させてもらっています。利用者5名が従事し、職員は必要に応じて働いています。作業は、家電製品や自動車部品の組み立て、検品作業を行っています。ここでは一日に何回かラインが変わったり、いくつもの作業があちらこちらで流れています。訓練生5人がまとまってラインを組むこともありますし、従業員のラインの中に分かれて入ることもあります。また、1人2人で単独作業を行うこともあります。訓練生1人ひとりが一日の間で何回かスタイルを変えながら働いています。その他に電動ドライバーや、コテハンダなどを使う作業もあって、いろんな作業にチャレンジすることができ、巧緻性がどんなところまで可能か、スピードが一般ラインに入ってどうなのか、従業員の方からの指示でどこまで対応できるのか、そして何よりも1日に何回も変わる変更にどのくらい対応していけるのか、というところも見る事ができます。このY産業は就業支援部で使っているということもあって、評価をするということが主です。実際にやってみてどうかという力を見るのが目的で、短期間だけの利用になっています。

企業を活用して広がる可能性

このように4つの企業で作業を行っていますが、企業内授産というのは二つの顔を持っています。一つ目は、元々の発想である模擬的な場面では、「働く」ということがなかなか体得できない人達に、より本物の場所で働いてもらおうということで活用している。もう一つは就業を目指す人達に対して、その人の働く力を実践の中で知るため

に、あるいは就業に必要な準備をする場としての活用をしています。二つの使い分けをしているのですが、企業はつい就職先であるとか、雇用前の実習先であるとか、というような考え方が中心になってしまいがちですが、利用の仕方によってはもっと身近にいろんな活用ができるのではないかなあと思っています。

私たちの目の前にいる彼らの「働きたい」「働き続けたい」というのは、人によって少しずつ違います。その形の違う「働きたい」を一つでもたくさん可能にするために企業を活用しない手はないと思っています。ついつい「あれは無理」「これは危険」と思ってしまうがちなのですが、まずはやってみるということを大切にしています。やってみると案外道は開けるなあと私は思っています。

今日のテーマとは少し違うのかなと思いつつも一つだけ共通することがあるのは、「会社は本物や」ということの中に「共に働く」ということが含まれていること。会社はなぜ働く意欲を育てやすいのか。それは、障害を持っている人も持っていない人も働いている、施設の中では、職員はもちろん一緒に仕事をしています。手を組んで後から見ているわけではないです。背中を見て働いてもらってはいるのだけれども、でも偽者と本物の違い、共に働くということが自然にできるが会社の中ではないかなと思います。いろんな働きがある中で、うちのように企業の中で働くということにこだわった所が一つぐらいあってもいいのかなと思えました。ありがとうございました。